

## 1.1 全国溶接技術競技会

溶接技量を競う溶接技術コンクールは、全国津々浦々で各種のものが行われているが、その頂点に立ち名実ともに“溶接技量日本一”を競っているのが日本溶接協会主催による「全国溶接技術競技会」である（写真 1.1～1.3 参照）。

全国コンクールの名で親しまれるこの競技会は、1952（昭和27）年に中小企業庁主催、日本溶接協会後援で開催したものを第1回とし、その後若干の紆余曲折がありながらも1957（昭和32）年の第4回から当協会主催となって今日のかたちとなり、1998（平成10）年には第44回を数えるに至った。

一方、全国都道府県における当協会支部においても溶接技術コンクールを開催するところが一般的となり、1966（昭和41）年の第12回からは今日のような各都道府県支部1種目1名の代表枠（一部支部2名）となり、開催地も各都道府県支部持ち回りとするところとなった。全国コンクールへの代表選抜ともなる支部コンクールへの参加者数は、1988（昭和63）年には全国で1,820人に達した。

また、競技種目は、当初はアーク溶接の部とガス溶接の部の2種目であったが、溶接技術の実状に対応し、1978（昭和53）年の24回から今日のようなアーク溶接の部と炭酸ガスアーク半自動溶接

の部の2種目となった。

競技課題についてもこの間には幾多の変遷があるが、最近20年来は薄板（板厚3.2mm）、中板（板厚9.0mm）を基本とし、細部を5年サイクルで見直すかたちとなっている。

審査は、外観検査、放射線透過試験、曲げ試験の3種について行われ、さらに不安全行為、反則行為の減点を行って総合点を決めている。審査には開催地の溶接技術検定委員会があたっており、きわめて公平厳正に行われている。

コンクールの実施にあたっては、全国コンクールあり方委員会を設置して運営方法を検討してきている。なお、実際の運営にあたっては、開催地の支部の尽力に負うところが少なくない。

全国コンクールを頂点に、支部コンクールを含めて、これら溶接技術競技会が溶接技術の健全な普及と発展に果たしてきた貢献はきわめて大きいものがあったといえる。



写真 1.1 全国溶接技術競技会開会式の模様  
（第44回大会＝平成10年10月，長野市）



写真 1.2 全国溶接技術競技会における競技の様  
（第44回大会＝平成10年10月，長野市）



写真 1.3 全国溶接技術競技会表彰式の模様  
（第45回大会＝平成11年5月，東京都）

## 1.2 機関誌・紙

### 1.2.1 「溶接ニュース」

当協会創立にあたって、発起人らは設立目的に全国的な溶接技術の普及と産業の振興を念頭に置いたところから、広範な展開を図る上で機関紙の重要性に着目、協会創立に先立って機関紙を創刊することとした。

このため、機関紙『溶接ニュース』は1948(昭和23)年11月15日付で創刊された(写真1.4参照)。これは溶接学会誌別冊として発行されたもので、協会が創立された1949(昭和24)年3月からは協会発行となった。機関紙の創刊が協会の創立よりも早いのはこの所以である。

創刊当初は月刊で発行され、1949(昭和24)年5月14日には第3種郵便物として認可された。1950(昭和25)年9月15日の発行の第23号からは、月3回発行となり、同年11月15日発行の第29号からは一時『溶接新聞』と改称したが、1951(昭和26)年9月5日発行の第58号からは再び『溶接ニュース』に戻った。1953(昭和28)年4月からは週刊となり、今日の原型がほぼ出来上がった。

機関紙『溶接ニュース』の編集発行は、当初は協会内の溶接ニュース出版局「溶接ニュース編集局」とも呼ばれていた)で行われていたが、1956(昭和31)年に溶接ニュース出版局が分離独立し(株)溶接ニュース(現:産報出版)が設立されて、機関紙『溶接ニュース』の編集発行も同社へ移管された。



写真1.4 「溶接ニュース」創刊号(右)と第2号

なお、機関紙の発行が(株)溶接ニュースへ移管となったことから、協会は(株)溶接ニュースとの間に出版等の事業に関する契約書を交わしたほか、協会では機関紙の監修のため出版委員会を設立、機関紙等の出版が円滑に行われるよう計らっている。出版委員会の活動に関しては第6編「出版委員会」:296ページを参照されたい。

『溶接ニュース』は、1998(平成10)年11月10日付をもって創刊50周年を迎えた。通算2306号である。

### 1.2.2 『溶接技術』

月刊の協会誌『溶接技術』は、1953(昭和28)年5月『溶接資料』の名で創刊された(写真1.5参照)。これは、内外の各種資料・研究報告・関係規格、とくに海外雑誌掲載の技術論文その他の技術資料の翻訳・抄録・紹介記事中心の編集であった。

その後、資料という名称は幅が狭いというところから、1955(昭和30)年3月から現在の『溶接技術』に変更された。また、1970(昭和45)年4月からそれまでのB5判からA4変形判となり、今日に至っている。

なお、『溶接技術』の編集発行も『溶接ニュース』同様の経緯を示しているが、『溶接技術』については出版委員会のもとに設けられている溶接技術編集委員会を毎月1回開催して、きめ細かな企画編集にあたっている。



写真1.5 当初「溶接資料」というタイトルで創刊された「溶接技術」

### 1.3 溶接図書

当協会は、機関誌・紙とともに溶接図書の編集発行にも大いに力を入れてきた。数多くの単行本が出版されてきたが、とくに協会の出版事業上特筆大書されるべきは、1954(昭和29)年から開始された「溶接叢書」全22巻の刊行で、溶接技術に関する体系的専門書のなかった当時としては画期的な出版事業であった(写真1.6参照)。

この「溶接叢書」の発行も機関誌・紙同様、協会出版局が分離独立した(株)溶接ニュース(現:産報出版)の発足に伴い同社へ移管されたが、協会は出版委員会のもとに設立された技術図書編集委員会等を通じて引き続き同社と緊密な連携を取り合い、溶接図書の編集発行を進めてきた。

とくに、「溶接叢書」の後継シリーズとして「溶接全書」全20巻(写真1.7)が、協会創立30周年記念出版として刊行された。さらに、現在は3代目のシリーズとして「溶接選書」全15巻の刊行が



写真1.7 「溶接叢書」の後継シリーズ「溶接全書」

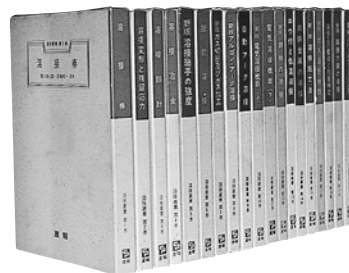


写真1.6 溶接技術の初の体系的専門書「溶接叢書」

1996(平成8)年から始まっている(写真1.8)。

こうしたシリーズものとは別に、協会部会・委員会自身の企画編集になる図書の単行本も随時行われてきた。これらは版元なる産報出版と連絡を取り合って商業出版されている。

これまでに発行された図書の一覧を第14編「資料」文献リスト一覧:556ページに示す。



写真1.8 3代目のシリーズ「溶接選書」

### 1.4 国際ウエルディングショー

協会は創立当初から海外技術の導入に熱心で、機関誌紙である新聞・雑誌を通じて海外文献・海外事情の紹介を行ってきたほか、展示会を通じて海外製品の紹介にも勤めてきた。

1952(昭和27)年には運輸技術研究所において、

同所輸入になる溶接関連機器の展示説明会を開いた。これを契機として翌1953(昭和28)年には、国内製品を含めて「第1回溶接機器材料展示実演会」を同じ運輸技術研究所において開催した。これが発展して今日の「国際ウエルディングショー」

となったのである（写真1.9～1.10参照）。

機関誌・紙や溶接図書同様、展示会も協会内の溶接ニュース出版局が主催運営して開催していたが、出版局が独立して(株)溶接ニュースが発足したことに伴い、同社との共催で開催するかたちとなり、今日に至っている。

溶接産業の発展に伴い展示会も拡大され、1961（昭和36）年からは「ジャパンウエルディングショー」の名称で開催されるようになった。その後、1969（昭和44）年にIIW（国際溶接学会）の年次大会がアジアで初めて京都で開催されることに対応し、「国際ウエルディングショー」として開

催され、名実ともに国際的な展示会となった。

以後、隔年に東京、大阪交互に開催され、今日では、ドイツのエッセンウエルディングフェア、アメリカのAWSウエルディングショーと並んで世界三大国際溶接ショーと称されるようになった。とくに、わが国の国際ウエルディングショーは、諸外国のショーがディーラー相手の商談の場として位置づけられているのに対し、エンドユーザーも対象に開発製品がいち早く投入され、実演も豊富で、先端技術が揃うということで内外の評価が高いものとなっている。

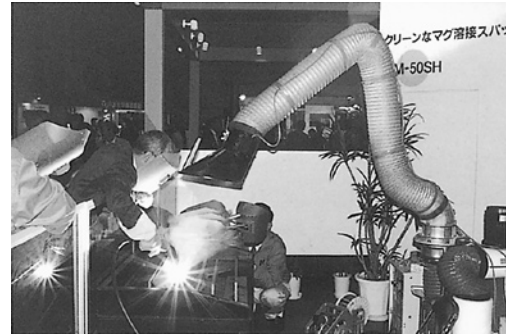


写真1.9 1996（平成8）年4月の「国際ウエルディングショー」（インテックス大阪）

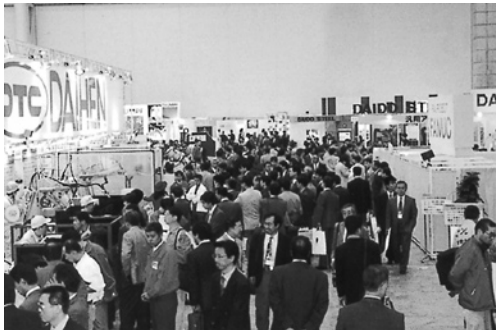


写真1.10 1998（平成10）年4月の「国際ウエルディングショー」（東京ビッグサイト）